

イギリス感受性文化とジェンダー

—医科学・教育・動物・植民地をつなげて見えてくるもの

上智大学 外国語学部 准教授

小川 公代

(お問い合わせ先) E-MAIL : ogawa.kimiyo@gmail.com



研究の背景

18、19世紀イギリス文学と感受性言説 (Discourses of Sensibility) についてはこれまで多くの研究がなされてきました。たとえば、感受性を賛美する言語文化が、いかに人間の神経体系を明らかにした解剖学の進展と連動しつつ、さらに、自然美を礼賛する美学的概念の創出ともつながっていたかという研究などです。またここ数年では、フランス革命や急進主義が群衆心理や暴力と結びつく感受性の政治的な問題や、スコットランド啓蒙思想、宗教的には福音復興の人間の内省にもつながる感受性、メソジズムの感覚的経験など、さまざまな感受性言説のありようが注目されるようになってきています。

私たちの共同研究の新しさは、これらの感受性言説の多様な位相を女性作家がどう意識し、〈植民地支配〉が制度化されていくプロセスに参入していったかに主眼をおいている点です。彼女らが、文学作品でその問題を取り上げ、感受性の言語態と効果的に結びつけていたのではないかというテーゼを掲げて、科研費に応募しました。

研究の成果

1年目の2016年度には、女性作家たちの意識と同時代のジェンダー表象を踏まえ、さまざまな観点からインドや西インド諸島における植民地支配の歴史やフィクションを連関させた研究を開始しました。奴隷、動物、女性の身体をめぐる言説が内包されていた感受性文学の言語的構造を読み解くことを主眼におき、メンバーそれぞれが積極的に国内外の学会に参加して海外の研究者と意見交換することも心がけました。

2017年度には、そのネットワークを基盤にして、イギリス、カナダ、アメリカの18世紀文学、ロマン主義の研究者を複数名日本に招聘することができました。たとえば、イギリスの18、19世紀文学の専門家マークマン・エリス教授をお招きして、大英帝国時代における感受性とジェ

ンダー表象をテーマとした講演を開催しました。海外の研究者との知的交流を通して、この時代に広く読まれた思想書、科学書、雑誌、新聞などの言説がいかに植民地制度と深く結びついて構築されていたか、また、それに対抗する女性作家がいかに女性／動物、身体、チャリティ、宗教、教育をめぐる感受性の言語態を包括した小説を書いてきたかについて明らかにしました。

最終年度の2018年度は、ちょうど感受性文学の金字塔とも呼べるメアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』刊行200周年記念の年でもあったので、“Romantic Regenerations国際学会”を東京大学と共催し、カナダから招聘したアラン・ビューエル教授にこの小説をテーマとした特別講演をお願いしました。また、この科研費研究の1つの大きな成果としては、この小説刊行200周年を世界規模で開催していた“Frankenreads”に参加したことです。上智大学ヨーロッパ研究所と協力して、英・米から1人ずつ、国内からも専門家を招聘して『フランケンシュタイン』の国際シンポジウムを開催しました。

今後の展望

最終年度もあと少しで終わりますが、3月にはシンポジウムを開催したいと考えています。もちろん人文系の研究であるかぎり、各メンバーがそれぞれ行う調査・研究が中心となりますが、過去3年間に開催された講演イベントや、複数回の研究会での意見交換を振り返りながら、感受性文化の言語態についての問題意識を共有し、さらに深めていくことを目指します。

関連する科研費

2016-2018年度 基盤研究 (B)

「近代イギリス女性作家たちの言語態と他者——感受性、制度、植民地」



図1 フランケンシュタインシンポジウム



図2 フランケンシュタインシンポジウムディベート